

8. 多胎児に認められた頭蓋内虚血性病変の検討

(小児科学) 高見 剛, 武井章人, 宮島 祐, 山中 岳, 星加明德
(産科婦人科学) 磯 和男, 野平知良, 柳下正人, 舟山 仁, 高山雅臣
近年周産期医療の現場では、不妊治療の進歩に伴い多胎妊娠の増加が一つの社会問題となっている。多胎児は単胎に比し周産期死亡率が高く、神経学的異常の発症頻度も高率である。今回我々は、当院新生児集中治療室 (NICU) に入院となった多胎児について、脳画像所見と臨床症状から頭蓋内虚血性病変と診断した症例について後方視的に検討を行った。
平成5年11月から平成11年1月までに入院となった多胎児は、双胎51組、品胎7組の合計100例であった。明らかな頭蓋内虚血性病変を併発したのは7例で、画像所見では脳室周囲白質軟化症 (PVL) が最も多く認められた。また、重篤な所見を呈したのは双胎間輸血症候群 (TTTS) を原因とするものであった。興味ある画像所見を認めた症例を提示し、周産期因子について検討する。

9. 脳塞栓症に対する脳低温療法の経験

(八王子医療センター救命部) 鬼塚俊朗, 赫 寛雄, 池田譲治, 池田一美, 池田寿昭
(脳神経外科学) 原岡 襄, 伊東 洋
近年軽微低脳温が脳虚血に対して保護効果を示すことが報告されている。今回我々は脳塞栓症に対して脳低温療法を行ったのでその結果を報告する。
症例、61歳男性。来院時意識レベルJCS10、発語がなく右片麻痺を認めた。頭部CT上異常所見は認められず、脳血管撮影で左中大脳動脈の閉塞を認めた。心電図上心房細動を認めたため脳塞栓症と判断した。直ちに脳低温療法及び血栓溶解療法を開始した。膀胱温で34.5℃まで冷却しつつマイクロカテーテルを閉塞部位に誘導し、ウロキナーゼ及び組織プラスミノゲン・アクチベーターの超選択的動注を行ったが、再開通を得られずそのまま脳低温療法を継続した。発症3日目のCTで梗塞巣を認められなかったため復温を開始したが正常体温に戻った7日目のCTでは出血性梗塞となっていた。結語。脳塞栓症に対する脳低温療法では脳低温中には脳保護効果を認めたが復温後に梗塞巣が出現した。

10. 近赤外分光法を用いた臀筋跛行の評価

(外科学第2) 高江久仁, 市橋弘章, 四方達郎, 土田博光, 石丸 新
間歇性跛行は、閉塞性動脈硬化症の代表的な症状で、多くは腓腹筋部痛で歩行不能になるが、まれに臀部痛を訴える。この臀筋跛行の客観的評価における、近赤外分光法 (NIRS) の有効性を評価した。血管造影検査で腸骨動脈領域に病変のある15症例 (男性13例、女性2例、年齢50~72歳を病変部位で4群に分類し、臀部と腓腹部に送受光プローブを装着、トレッドミル運動負荷法でNIRS測定を行い、低下したoxy-Hbと上昇したdeoxy-Hbが、負荷後より復し交叉するまでの回復時間 (RT) を比較した。主訴が殿筋跛行であった症例5例で、腓腹部に比較しRTの延長を認めた。RTが他の部位より著しく延長し、殿筋跛行が起きると示唆された。NIRSの臀部での測定は、治療法の選択に有益な情報を与え有効であった。

11. 無症候性bruit例の頭部CT所見

(老年病学) 阿美宗伯, 岩本俊彦, 深谷修一, 木内章裕, 馬原孝彦, 高崎 優
【目的】一般診療で頸部に無症候性bruitを聴取することがあるが、これと脳病変との関係を明らかにする目的で、当該例の頭部CT所見を検討した。
【方法】頸部にbruitを聴取するが、既往に脳血管障害のない27例を対象として、頸動脈の超音波・血管撮影検査および頭部CT検査を施行した。
【結果】
1) 対象の背景因子：年齢は72歳、男23例で、高血圧、糖尿病、高脂血症、喫煙が各々70%、30%、37%、70%にみられた。bruitは頸動脈54本中42本に聴取された。
2) 頸動脈所見：病変は51本あり、このうちbruit (+) 側では高度狭窄が23本、閉塞が9本と多かった。
3) 頭部CT所見：梗塞巣はbruit (+) 側で12個、bruit (-) 側で1個みられたが、有意差はなかった。
【結論】無症候性bruit例は高率に頸動脈病変を伴い、その11例38%に脳病変がみられたが、殆どはレンズ核周囲のラクナで、bruitとの直接的な関連は明らかでなく、むしろ危険因子との関連が示唆された。